



鶴芝集

二編

凡例

- 一 集中の歌仙行ハ一席乃即真書れし
 所一合を論せり
- 一 他の句れししありを採りたりたり
 朱松叟の誤なり
- 一 木曾道中記をやり書くをとりたりハ
 柳庄より採り

鶴芝集

希編
 二編
 三編
 四編
 五編

江戸ニ出版
 善光寺ニ出版
 松本ニ出版
 編方ニ出版
 飯田ニ出版



世集をけりしと影す。其存は
 初編は見えし。角一三四又其

編を見て朱橋使の風骨と
志流へ一に編結を世人世に不
下手は上手にかけり物なる事
知ぬ下と十午色を先味

村路菴文北序

日本橋より板橋つり

江戸を出て雨にならむ様成 松兄

白田の川よたにふるる川入間お里あり

浦和宿を出れ宿志山より入る大に宿の

こたすこたすちぬ見ゆる

吹上村をくみぬ城に二

春雨の朝くあくる藤原に 真池

きく舟中をあくる朝郎 松兄

世駟平蓮生山懸谷ち阿了

鳥をたに合る懸谷の境くぬ

士朗

志統ては枝買ふ花の木のたが

卓池

山と見るとは色弥生の木立高

松見

二光山赤城山見ゆるな庄者

雛子鳴き猫をよひ也を條をぶ

双鳥

ちる花は穢鳥の祢々一丸

長翠

武城上野の国境くたの川

雪とちりぬに鳴き河子鳥 士朗

新田宿より新田足利の道あり鳥川阿了

春乃夜の夢の祢けりかす寸阿 松見

舟の船橋は舊跡の倉ヶ野をうり

雪乃るぬきう野と遠く妹の志 士朗

郷原村より妙義山へ

寺々をぬ名不たのふはうが 同

角杖や天物見くれをきあり 卓池

碓氷峠

加賀貞貞も碓氷峠や本丸の墨 松兄

お子所是をう信の国をう

春風のたつもろかする山は哉 真池

侍ありはくぬしのや山はく 松兄

将井深より皆掛一里中阿くくをき場の系

とふよとく浅間獄のまを野ちり

行春や雪のふは月 海岩山 士朗

子曲にそふて上田よふお帯如色の二人を

乃ぬそく子曲河らひかきを出て越後に合

一水美里の情片くにたに女ふ原田斐に

可拉里阿く越中喜年丸琴うあうそこま

都の斗入る去序のぬはくすうて阿く

くもを思ひいて 士朗

あひう糸を出る越路にいふ所の

ちんやうしものよひ思ひぬいふの

日数ぬれは旅のおれもあはれ
 い春も仰う何やう旅のやい
 抑う旅し居れ見ゆ一つ
 田中へ捨る園をこの松犯す
 羽織のや旅る風うふくたう
 ちとくと園にさへ三日乃月
 茶の葉ふらふ轉一の葉
 炬をふる雲のなと迹はさす
 兄 如毛 帯 松兄 卓池 雲帯 士朗

世にうつるゝ山を見ゆる
 細き水やうもたうたうむし
 もれいひもあまゆか教の
 うまのゆをさうぬ男のさう
 流るもく遠里れ 鐘
 去丸か月お出する雪の
 槽たく一灰はむし書をす
 知落したちぬとまれとさぬえ
 兄 池 帯 朗 池 毛 朗

板橋く徑てもとに 市 ぬ
一夢の結 結 けしき 花ちりて 見
木 廿方の 目を 去 塔の 啼 朗
投やうに ちあふ ちん ちん 笛の 後 宅
くさめしき 出 家 満 けの 陰 池
走ら ちあふ ちん ちん 人 ちん 朗
登に ちりて ちん ちん ちん 帯

彼岸

南 才し ちん ちん ちん ちん ちん ちん 雲 帯
春 寒し 人 ちん ちん ちん ちん 行 如 宅
家 古く 柳 ちん ちん ちん ちん 筆 茂
ちん ちん 魚 乃 ちん ちん ちん ちん 菊 成
横 ちん ちん ちん ちん ちん ちん 山 見 ちん ちん
妙 捨 山 ちん ちん

横 吹 いた ちん ちん ちん ちん ちん ちん 松 見
春 柳 ちん ちん ちん ちん ちん ちん 士 朗

矢代有於

斗睡亭無事

雲少佳晴や松子海し月の影
 初くこころる石川乃春
 於歌は海童の袖は常しく
 味ををけくる三三まのほむら
 軒ハ皆むしーの形のおもろく
 五月のやまをくくふまをさ

斗睡 松兄 士朗 卓池 吐夫 睡

暮てり望田の磯に舟かろく
 海すのあゆみに起るあぬん
 若木の気は咲ははくふと定なり

兄 朗 池

犀川

犀川の氷やけろくろくは凍の意
 柳もく夜ハ明たなる海の上
 早やうあれたくこうまへ生まろく

卓池 斗睡 吐夫

三月廿六日古松亭にすすをはる

花の庭を歩み乃日三毛
花の笑出づれをうよも末統を
笑一きれ

有ぬにあれく魚んを所様 士朗
下流子おる山吹乃 柳莊
すを束て頼白ほ赤も寄崖 松兄
葉のかたを開る留もなし 希言
こつさけひんもくたる膳の上 卓池

とらうくと仲あつす 杜厚
時ふあ。然路を人のしらやま 仁化
琵琶かく程乃ちうもなき 文兆
俵此ふくなくたるうり衣 柳司
四五本竹の枯るちり様 士朗
月代やそ城の屋敷の後ろとら 柳莊
いく度馬を扱ふる寄あらさ 松兄
とらうと束てふ小舟を扱はら 希言

山平おのゝるをた伊とや
 雨鳥のそぬんを道あとも
 いちちたのきまに飯をとるし
 戸あふれはらちく見ゆる里の花
 むらりとさきあはれたる風
 伊るも猿しなれらうらに
 ねさうあふるきあすもすも
 山をたあふらたはたはら
 五什
 杜厚
 卓池
 文兆
 九化
 五什
 榊莊
 士朗

松の古義をとあふ玉乃然
 志く砂にちあなをさほのたつきて
 石も尾をさ大山々青
 年の行有とさうて人あし
 雪はあもとぬ實にほれゆえ
 ふる鼓た〜やなるは風や
 今五月の月にはつて蘇は
 ねりろく〜麻のふりし芋田
 希言
 松兄
 艸司
 卓池
 文兆
 杜厚
 士朗
 九化

芒刈 込 飯 貝 の 里 松 兄
 珠 敷 とうそ 壁 たむら とうそ 柳 莊
 云 つき の あく 針 立 卓 池
 如 月 乃 志 も 十 五 日 降 希 言
 西 と 東 一 追 分 の 春 杜 厚
 あく 酒 の 志 も 花 の 中 艸 司
 もう 横 を け ち ち ち 空 筆

希言言詠雜子山吹

久米路の橋から出たぬ
 心してゆるといふ

山 吹 や く 久 米 路 の 橋 見 了 郎 士 朗
 や ぶ ぬ 乃 月 ね とも い ぬ 春 庵 松 兄
 志 々 せ け ぬ きて ち ち ち 卓 池
 遠 里 や い ち 書 きて 雜 子 杜 厚
 二 夜 の ち 書 きて 雜 子 艸 司

菜畑の中をうもさきん外
山吹の色香を通し朝日
九化
文兆

遊壽福山名詠

孫養

物のうすくに練のまはく世松哉
菘花の花三日咲ては体なり
旅人の體とつく也あらは花
よかふ家本は若きふせう孫の志
士朗
松兄
卓池
東文

あらは花折をいかつよ昔か
見ふありまはる葉なる花の志
青くや文ももちに孫花
ゆちの舟をすく一筆はるにたり
んよちちや夏のさしそふ花の志
ゆきか松の葉をりゆち花
きし練や一里出てはそこの花
蒼いつまやむそふちの花
五什
宋路
素十
一董
良史
岐山
如藻
希言

旅立白ハ二月廿八日之行程二百里半時
佛前ニ坐すももの如し又三月廿八日
なり善光寺此如來おに通ぬと云
報す吾祖に十日の歩をさす
あつそりふ祖師の志日にあつ
晨初一時乃法經を宣すと是き
不思義に有る善なり

朝より二重のうせのひもれ 松只

月佛位の一善女ころた来て 卓池
通ぬよりす念仏の姿に松風に
たつと地ひにぬぬまたに
老る人半よるころは佛のまをら
せたまはと見はるるにぬぬの
衣よりおふ気色もなくよりほひ出
群集しるるがしるるなり

朝より風掃出しは事ぬ 士朗

むし柏崎の光おれし一寺の
かまを破くあかにもう今の世は男か
堂に登り佛を近くおすのゆとせか
又和末の法教と

五十鈴川清きなれあつあれ
つれふこれおもにやうん
かふふも事なう思ひあせし士郎の
い出あふるる。

九化寺無り

は春字

春ねおほしあつるもかきり 士郎
行春の山と山々に押流きと 松兄
けおねおあまうたうこし山 卓池
ゆく春ともに尾張のあらうと玉乃
か三枝と度あふ有明にあれをるんと
い出あふ傍もなうる今唯家橋の

あつしきまつりなむらさき
かの行程記るるも
ふりまじりし様ふりのせむふふ
あつれにもつれもつれもつれ
士朗れえきまらぬ松元の四村も
是よりあやしきまつりなむら
さきまつりなむらさきの川に

さつれもつれもつれもつれ
むらさきまつりなむらさき
吐たつれもつれもつれもつれ

享和辛酉初夏

柳在知

朱梅翁乃來也也者松先ありた
卑池何重ちの手に梅とらん
ありむしん今もるるに
詞伯と評せ舞ふに
閑とよいと

澤 雲希 誌

雀芝 續 篇

李 臺 撰

三月十日己未
廿八古里の友
予燕く其るる自も取
出にか
か
なめり
外は

とた卓池松兄の三人と事なり
朱樹の翁は江戸人ながらおん
がし無しあはる古里の
をふがくし中にもある
小男いたく居る事のみひあ
癪ありきとは松兄の服を
出ししき文臺をたす
今も存しきあり勢

繪巻にて

海を見て居るもの後様哉 卓池
月行くけは夜は風 松兄
森は床乃花は角のわたりて 李臺
左り孫多よわむむし 良之志
酒毒とさげの音はたもし 士朗
我名をくし一日二日あは 杜石

住吉乃松をこ枝をり提り 秋國

はらきこれす〜雨の空 朗

隻乃夜、恨をうけ〜吟ゝぬな 志

夕、是抱へ〜山 口 臺

〜と鞆被の扱を取乱〜 石

十日乃〜國も此〜かりきり 國

喜の難と目是〜やそをぬ

さそ歌仙一折よ〜ぬも在い

か〜と〜と〜家にも〜

寺〜と〜豆が福よ

赤敷山

あ〜も〜皆人〜上野哉 卓池

世のま〜と〜ん限を極外 松兄

我人、見〜も同出度さ〜長哉 士朗

木母寺

おまゝとていふを柳よほしき松を 松兄

花に鈍いももる罪のほろり 士朗

糸一縷の家もはたはし 李臺

とていふをみすの宮を懸井

の葉波のぬすみたるはたはし

いそいでとていふをみす

前書あり 未等

新及専私のむろいり

富士のまをるをみす 卓池

糸しりし田螺の角をみす 存彦

毎乃小さく末なるをみす 女 未等

松のけろもはたはし 士朗

風う吹くも歌なるをみす 一茶

月ももも 雙湖

平角をいふと土器をさす 等
汐満をいふと小舟をいふ事 池
古記都は油をいふ事 彦
女史の羽織をいふ事 也
きつと一日句七 朗
冬末風をいふ事 茶
乙子の舟をいふ事 湖

自然の産物をいふ事 等
夜明をいふ事 遠山池
西汐平の舟をいふ事 彦
局をいふ事 清達をいふ事 也

夢をいふに袖をいふ事 等 乃輔

いづく眺る存のまほ
子雀の啼なきひる五六
其をこそ一見一あもこの陰
延こゝ家西も赤も門なきや
旅乃き一まのすまな人そ
松松風さへ時は夜のぬか
墓をこそあはれ一若倉の山
松見
梅夫
み彦
玉之
士朗
兄
輔

鍛あらず菴り一ツのまほ
兔乃鳩の豆まはま
こゝと波うち寄る冬の空
梅生の旅の擲手り一なら
いづくの酒の恨のほのま
あつとさすまをる関のつらま
針りの通る斗一の巖峨の所
彦
夫
朗
梅壽
輔
之
彦

月より先きく法師五人 兄

おみそりくえをさ辛を堀平く 壽

厚より多きがむしおとくす 輔

月ましく遠山極嘆ふきり 士朗

船尾の鷹乃進む一風 考

米字もち菊のまはが惜よ東を 無説

わらわの筆一をくつ又雨 一蕙

とくひ日の外睡むや子もん 菜波

いさりくろ者乃松をかうむる 胡準

忠則のおとせし世と哀なき 彦

夜の法度よものも答はさる 朗

祿のそくハ山まてけし本願寺 蕙

いづれの花もをり琴をめぐり
説

さぬ燕を蝉のけおまを
準

むしりしつ占はぬり
波

能風の菘毛のやよ吹よきり
朗

煉鳥入間乃蕎麦の最中
彦

存ころを神主とのうおのり
説

のふけ合々々あふ幕串
蕙

かろむの庭よあつらさから波
波

かろむのすしき笠をけしん
準

